Journal of the Faculty of Environmental Science and Technology.
Okayama University
Vol.17 No1,pp.23-43, March 2012

観光客と地域住民からみた岡山県総社市 備中国分寺の景観と観光

水田智也 *　市南文一 **

The Landscape and Sightseeing of Bittchu-Kokubunji Based on the Viewpoints of Tourists and Local Residents

Tomoya MIZUTA *　Fumikazu ICHIMINAMI **

In this paper, we examined the landscape and sightseeing at Bittchu-Kokubunji in Okayama prefecture carrying out the questionnaire survey to tourists and local residents. Both tourists and local residents estimate that the landscape ofBittchu-Kokubunji is wonderful, and it has several images such as historical, quiet, and old-fashioned, etc. AlthoughBittchu-Kokubunji is one of the famous tourist resorts in Okayama prefecture, there are quite few tourists compared with the degree of notability. Almost all tourists' age was 50 or more.

As more active sightseeing activities, the number of times of holding events, such as an announcement of traditional performing arts, lighting of a five-storied pagoda, photograph or a sketching convention, needs to be increased. An attractive tourist resort should be created by the cooperation of local residents and administration.

Key words: Landscape, Sightseeing, Local residents,Bittchu-Kokubunj*i*

1　はじめに

1-1　研究背景・研究目的

近年、観光を取り巻く社会・経済環境は多様化しており、今後の観光振興や観光地づくりを進めるには、これらの変化や影響を検討しながら的確に対応していくことが求められている。景気変動、価値観の多様化、生活様式の変化などに伴い、人々の観光地に対する需要が変化し、観光行動が変化している。従来の団体旅行や慰安旅行による観光客数の割合は次第に低下し、家族や友人などの小グループを中心とする観光行動が顕著になってきており、「見学」観光から「参加・体験・交流」などのより主体的・能動的な観光を求める傾向が強まり、さらに、地場や本物の素材を利用したものへの志向が強まってきている。

たとえば、竹田ほか（2011）は、20 ～ 30 代の人々に対象を限定して、Florida（2002）の基準による研究者・エンジニア・IT・メディア・アート・デザイン・医療・経営・法律の専門職従事者（創造的階層）とそれら以外の職業従事者に区分して旅行志向の相違を調査し、祭りや芸術を対象とする参加・体験型の新しい観光形態として、香川県直島の現代アート観光などに注目している。また、猪池（2010a、2010b）は伝統的な祭りの１事例として三重県伊賀市の上野天神祭を学生とともに調査して、その実態と課題をきめ細かく報告・指摘している。大規模な観光地を対象とする研究の必要性は重要であるが、今後は、それら以外の中・小規模とも言える観光地についても、研究の眼が少しずつでも向けられるべきである。

新しい旅行の価値観の特徴は、「テーマ性」「地域性・地域への寄与」「参加・体験」「地元での交流」などであ

*　(株)三浦工業
**　岡山大学環境理工学部環境管理工学科 景観管理学分野

り、日本の観光立国推進基本計画では、新たな旅の類型として「長期滞在型観光」「グリーンツーリズム」「エコツーリズム」「産業観光」「文化観光」などが具体的に挙げられており、これらは長期的需要を期待できる可能性がある。また、本物志向とも関連して、自然環境への関心の高揚の中で、できるだけ人工的に改変しない素材・資源を望む傾向が強くなっており、自然の中での余暇・レクリエーション活動が盛んになってきている。その意味では、個々の観光拠点施設だけではなく、それらを含む地域全体の景観やアメニティが重視されてきている。

いずれにしても、観光需要・行動の変化に対応し、激しい競争を乗り越えて観光地を持続させていくためには、より個性的・魅力的な観光地への発展が必要である。観光客を迎えるホストの立場から現状を再検討し、現代的な需要に適合した観光地へのリニューアルを進めることが必要である。

このような認識に基づいて、本研究は観光資源を支える要素の１つである景色・風景・景観に焦点を当て、景観をやや意識して観光行動を分析する。地域特性を活かした景観はその地の魅力を視覚的に高めてくれるので、観光振興には地域の歴史・文化を活かした魅力ある景観づくりが重要課題になってくる。そこで、魅力的な景観形成が観光振興の鍵になるという視点から、国指定史跡である備中国分寺（びっちゅうこくぶんじ）跡、国指定重要文化財である五重塔が景観・観光で抱える課題とその改善方策について考察することを目的とする。

1-2　研究対象・研究方法

本研究の研究対象は、岡山県総社市上林（そうじやし かんばやし）に位置する備中国分寺とする（**図１**）。吉備路風土記の丘県立自然公園の中心でもある備中国分寺は、岡山県道 270 号（清音真金）線沿い、旧山陽道の北、JR 吉備線の南部、高梁川（たかはしがわ）の東にあり、近くには作山（つくりやま）古墳（全長 286m の前方後円墳で国指定史跡）や造山（つくりやま）古墳（全長 360m の前方後円墳で国指定史跡）、吉備路郷土館などがある。岡山県産業労働部観光課（2011）によると、吉備路・備中国分寺への観光客数は年間 50 万２千人と推計されている。この数字は備中国分寺のみへの観光客数ではないが、同観光課が発表した岡山県の 41 カ所の観光地のうち、観光客数が 12 番目に多い。1997 年以降における備中国分寺の観光客数の推移は**表１**の通りであり、かつての観光客数は約 30 万人であったが、2003 年以降は約 50 万人程度に増加している。

また、備中国分寺の歴史や仏教に関する文献は多数みられるが、観光に関する研究例はほとんどない。研究事例が少ない備中国分寺の観光動向を検討する意義は、少なくとも岡山県や県の南部にとってはそれなりにあるものと判断し、研究対象に選定した。

図１　備中国分寺とその周辺
Google　地図データ　ZENRIN　より作成

表１　吉備路・備中国分寺における観光客数（千人）の推移

年　次	観光客数　（千人）	指　数
1997 年	305	100
1998 年	266	87
1999 年	273	90
2000 年	290	95
2001 年	279	91
2002 年	304	100
2003 年	548	180
2004 年	553	181
2005 年	539	177
2006 年	485	159
2007 年	521	171
2008 年	465	152
2009 年	500	164
2010 年	502	165

岡山県産業労働部観光課（2011）により作成.

研究方法では、備中国分寺の景観と観光の現状を調査するために、総社市役所で聴き取り調査と資料収集を実施した。その後、景観形成や観光に対する意識を調べるために備中国分寺への観光客と備中国分寺周辺の地域住民にアンケート調査を実施し、その両者を比較検討した。これらをふまえて、本研究では備中国分寺の景観・観光における課題とその改善策を考察する。

２　岡山県の観光動向と備中国分寺への観光客数

総社市の備中国分寺における観光を検討する準備として、最近における岡山県の観光動向を俯瞰する。なお、過去における類似的検討では、市南（2002）を参照されたい。**図２**は、吉備路・備中国分寺を含む岡山県の主要な 11 カ所の観光地別の観光客数の推移を示している。観光地は、吉備路・備中国分寺よりも観光客数が多い場所を選定した。

倉敷美観地区は岡山県内の観光地では最多の観光客数を集めており、1990 年代には毎年 350 万人以上を集客した。観光客数の減少・停滞傾向が 21 世紀に入って定着しているが、交通の利便性に恵まれている倉敷美観地区は依然として岡山県では最大の観光地である。JR 倉敷駅の北に位置していた倉敷チボリ公園には、1997 年７月の開園の翌年には 300 万人／年以上の観光客数が訪れたが、その後は観光客数は急減し続けて 2008 年 12 月に閉園し、その跡地は商業施設に転用された。鉄道駅の真北に位置する恵まれた立地であったが、開園の経緯がきわめて異例で紆余曲折があったり、第３セクター会社（岡山県などが出資）の経営予測が杜撰であったため、テーマパークの経営としては典型的な失敗例に終わってしまった。

また、「西の軽井沢」の異名もある蒜山高原は夏季の避暑地などとして著名であり、1990 年代半ばまでは 200 万人に及ばなかった観光客数が 21 世紀には約 250 万人に達し、最近では、ひるぜん（蒜山）焼きそば（鶏肉・高原キャベツに味噌だれ）で地域活性化に貢献している。海水浴場で知られる玉野・渋川の観光客数は 1993 年には 100 万人以下であったが、その後は次第に増加して 21 世紀には 200 万人を超えるようになった。これらに対して、鷲羽山（わしゅうざん）とその周辺の観光客数は 1993 年には 200 万人以上であったが、その後は減少して低迷している。

温泉地である美作（みまさか）・湯郷（ゆのごう）温泉には 90 万人前後の観光客数があり、最近では女子サッカーチームを通じて地域活性化をアピールしている。湯原（ゆばら）温泉には約 60 万人の観光客が訪れる。これらの温泉地の観光客数には、大きな変動はない。桜の名所である津山（つやま）・鶴山（かくざん）公園（津山城跡）の観光客数は、かつては 40 万人にも達しなかったが、2005 年に備中櫓が復元され、最近では約 60 万人を集客するまでになった。

日本三名園の１つの大名庭園であった後楽園（こうらくえん）の観光客数は、時折、百万人を超えることがあったが、最近では 70 万人にも達しない年もあり、県庁所在地のカルチャーゾーンに位置する観光地としては、相当の奮起が望まれる。また、岡山農業公園・ドイツの森（赤磐市；吉井町と隣接する３つの町が合併して、2005 年３月に発足した。）は、移転した是里（これさと）ワインの醸造所を擁し、ドイツの農村や傾斜地のブドウ園を再現して造成しており、開園当初とその翌年の 1995・1996 年には 90 万人以上の観光客が訪れたが、その後の観光客数は減少し、最近では往時の約３分の１程度である。ワイン文化は、日本酒・ビール・焼酎文化の重厚な壁に阻まれており、それが日本で普及するには相当の時間と一層の工夫を要する

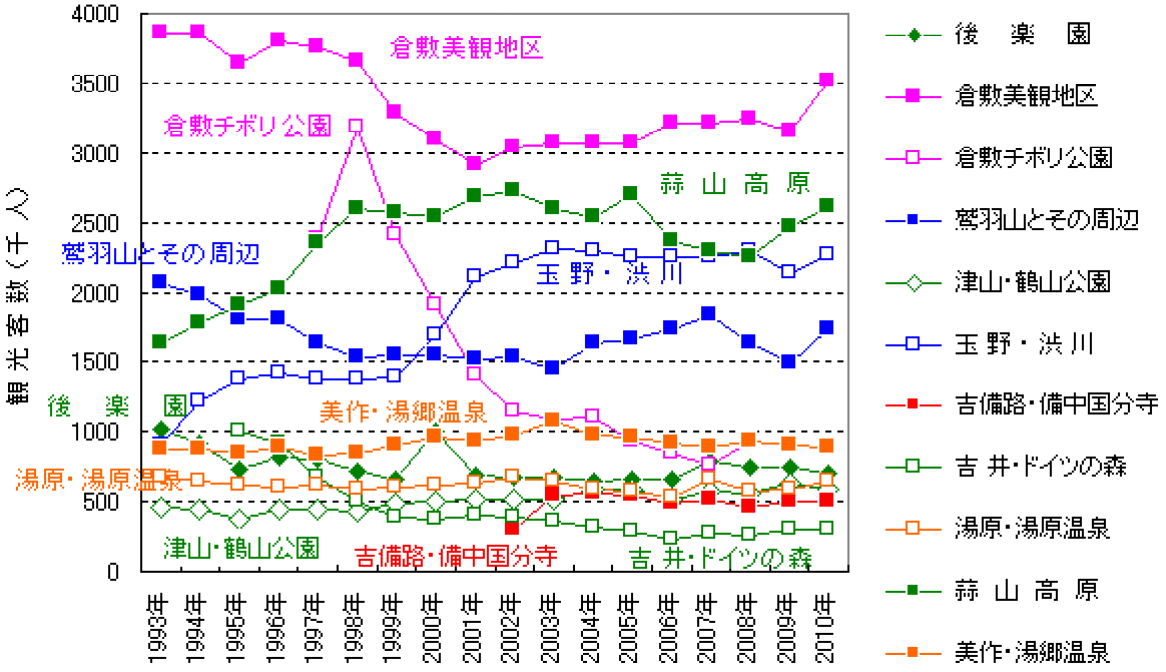

図２　岡山県における主要観光地別の観光客数の推移 a（1993 ～ 2010 年）

岡山県産業労働部観光課（2011）より作成.

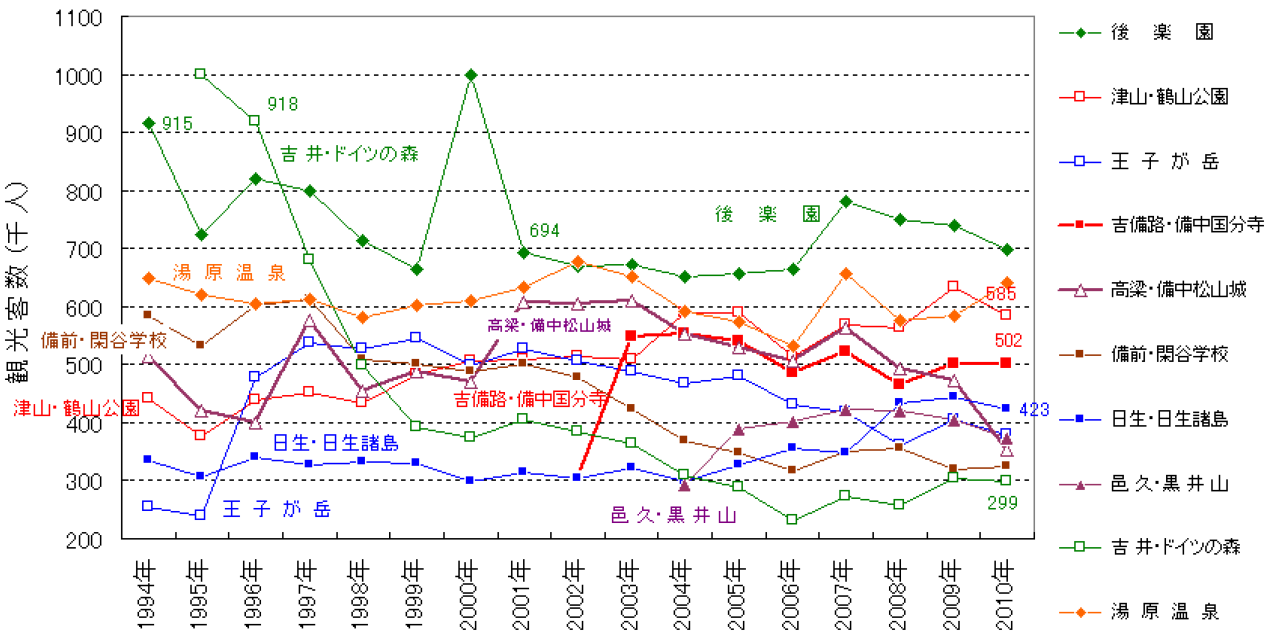

図３　岡山県における主要観光地別の観光客数の推移 b（1994 ～ 2010 年）

岡山県産業労働部観光課（2011）より作成.

であろう。

図３は、岡山県内の主要な 10 カ所の観光地別の観光客数の推移を示している。観光地は、吉備路（きびじ）・備中国分寺への観光客数と同程度の観光客数がある近くの場所を選定した。その結果、**図２**で登場した５カ所の観光地が含まれることになった。王子が岳は鷲羽山や玉野・渋川の近くに位置し、その観光客数は 1995 年から 1996 年にかけて急増したが、その後は低減傾向にある。

高梁（たかはし）・備中松山城の観光客数は 60 万人を超えていた時期もあったが、最近では集客に苦戦している。備前・閑谷（しずたに）学校の観光客数も 60 万人を超えていた時期もあったが、最近ではその半数程度に減少している。日生（ひなせ）・日生諸島の観光客数は 30 万人台を維持していたが、最近では 40 万人を超えるようになっている。邑久（おく）・黒井山の数値は、岡山ブルーラインが建設後 30 年を経過して無料化された 2004 年以降に公表されるようになったが、約 40 万人の観光客を集めている。吉備路・備中国分寺は、近在のこれらの観光地と競合しているのである。

次に、**図４**は岡山県内の主要な観光地別の観光客数（2010 年）を描出している。岡山県南部への観光客数が多いことが明らかであるが、これは岡山市と倉敷市の居住（夜間）人口を合わせると百万人を悠に超えて、岡山県人口の約６割を占めていることから当然である。しかし、岡山市に関係する観光客数が５カ所に分かれて集計されていることにより、岡山市への観光客数が少ないような錯覚を与える可能性があるが、旭川の下流にある後楽園は岡山市中心部とほぼ一体的であることなどを考慮すれば、ある程度は納得が得られるかも知れない。

県の北西部では、蒜山高原への観光客数が従来、顕著であるほか、約 90 万人の観光客がある美作・湯郷温泉も健闘している。最近では、日常的に食される安価で庶民的な料理である、いわゆる、B 級グルメのひるぜん焼そば、津山ホルモンうどん、日生のカキオコ（新鮮な牡蠣が入ったお好み焼き）が、地域興しに一役買っており、今後、観光客が増加する要因になり得る。また、農山漁村の観光資源の知名度は、従来、県外には低いので、有名な観光地と組み合わせて広報宣伝するなどの工夫を凝らせば、新たな観光需要を開拓・創造できる余地は岡山県に限らず、充分にあると考える。

３　備中国分寺の概要

3-1　備中国分寺の歴史

総社市役所のホームページなどによれば、備中国分寺は総社市南部のアカマツにつつまれた丘陵地のほぼ中心部に位置し、聖武天皇が 741（天平 13）年に仏教の力を借りて天災や飢饉から人々と国を守ることを目的に建造した官寺である国分寺の１つである。当初の建物は南北朝時代に焼失したと伝えられ、現在の建物は江戸時代中期以降に再建された。境内に聳える五重塔の高さは 34.32m であり、1844 年頃に完成した。この塔は、屋根の上層と下層がほぼ同じ規模の細長い造りで相輪も短

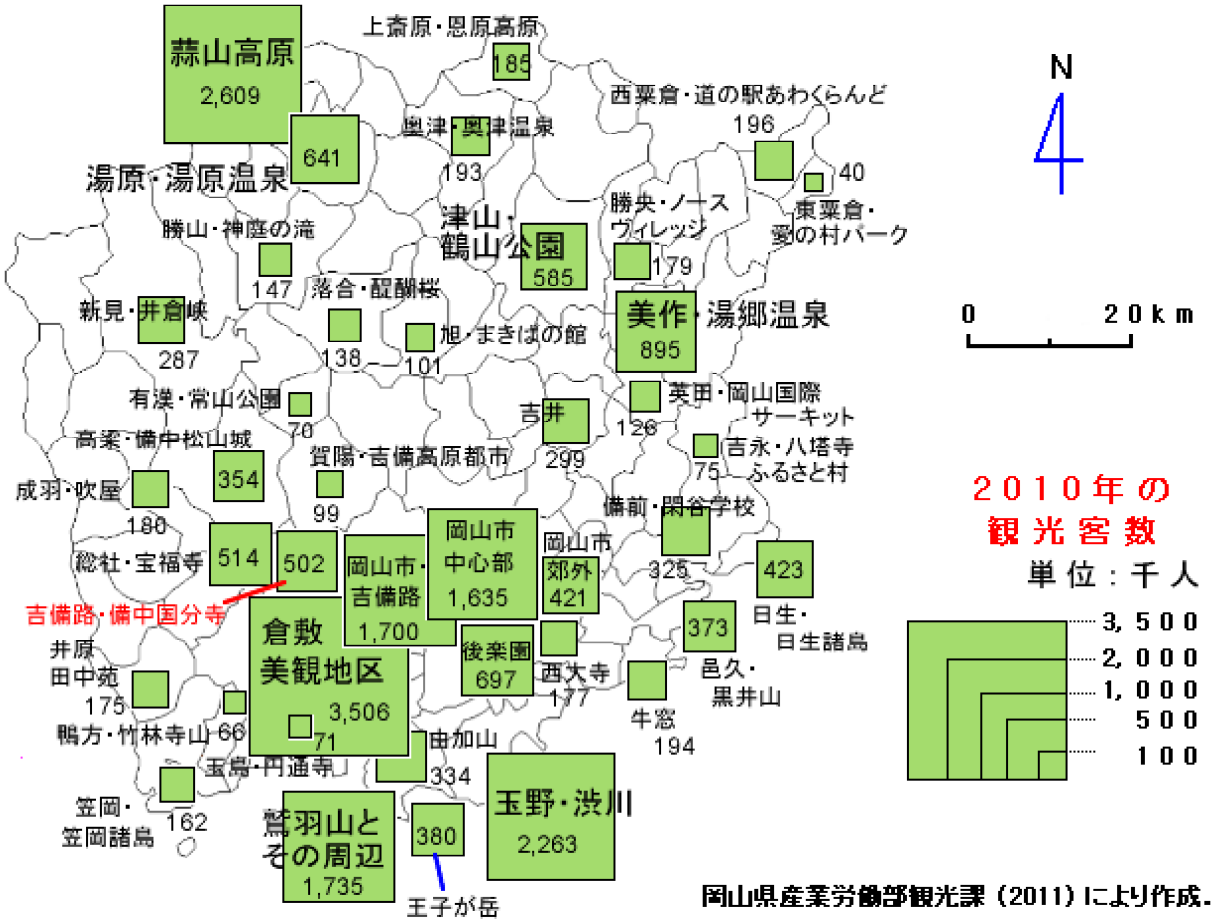

図４　岡山県の主要観光地別の観光客数（2010 年）

写真１　備中国分寺の正門

写真２　備中国分寺の境内と五重塔

いずれも、筆者らの撮影（2010 年１月）による.

く、江戸時代後期の様式を濃く残している。また、国分寺の五重塔として残っているのは全国でも備中のみであると言われている。1991 年 9 月、虫害などで四・五層目の解体修理中であった五重塔に大型台風が襲来し、豪風が三層の屋根まで吹き飛ばした。これにより、前代未聞の全面解体修理を余儀なくされた。しかし、現在では五重塔は復旧されており、備中国分寺は過去の吉備の人々からのメッセージを現代に伝え、幾世紀を越えて吉備路の象徴として人々に敬愛され続けている。また、備中国分寺周辺は四季折々の変化を見せ、吉備路（岡山市北西部、倉敷市真備町、総社市にまたがる一帯の広域観光地）の代表的な景観になっている（**写真１**、**写真２**）。

3-2　備中国分寺におけるイベント

備中国分寺周辺のれんげが開花し見頃となる４月末から５月初めにかけて、毎年、「吉備路れんげウィーク」

写真３　桃の花と備中国分寺

写真４　菜の花と備中国分寺

いずれも、筆者らの撮影（2010 年４月 10 日）による.

写真５　蓮華と備中国分寺（2011 年５月８日）

写真６　秋桜と備中国分寺（2011 年 10 月 15 日）

と題して、吉備路れんげまつりや幻想の響宴、五重塔ライトアップなど、様々な観光行事が開催される。吉備路れんげウィークを代表する吉備路れんげまつりは、平成 23 年で第 26 回を迎え、郷土芸能の披露やお茶席、物産品の販売、五重塔の初層の公開などの多くのイベントがあり、多くの来訪者で賑わいを見せた（**写真３**、**写真４**、**写真５**）。

また、幻想の響宴では、ライトアップされた五重塔を背景に、和太鼓・神楽（国指定重要無形民俗文化財）などの郷土芸能が披露され、備中国分寺は幻想的な雰囲気に包まれる。また、大晦日には備中国分寺五重塔年越しライトアップが開催され、五重塔のライトアップとともに、蝋燭の灯りによる道案内で境内を幻想的に演出し、来訪者を魅了する。

3-3　備中国分寺の現状

上述してきた通り、備中国分寺には四季折々の変化があり、春と冬にはイベントが開催され、多数の来訪者がある。田園が広がり、田舎風の長閑な雰囲気を味わうことができる風景は心を落ち着かせてくれる備中国分寺と五重塔に調和しており、歴史を感じる美しい観光地として岡山県のランドマークの１つになっている（**写真６**）。しかし、イベントがない折には、観光客の大半が備中国分寺を短時間で後にする。つまり、備中国分寺は通過型の観光地に甘んじている。備中国分寺を訪問する観光客の目的は、五重塔やその周囲の景観を見ながら散策するなどの「見学」観光であるため、その目的が果たせれば十分である。しかし、備中国分寺に一層満足してもらうには、「見学」観光から「参加・体験・交流」などのより主体的・能動的な観光活動への対応も必要である。

４　アンケート調査からみた観光客と地域住民の意識

4-1　アンケート方法

調査地は岡山県総社市の備中国分寺とその付近である。アンケート調査は、観光客と地域住民の双方に実施した。観光客に対しては、五重塔周辺で質問して調査票への記入を依頼した。地域住民には、自宅を訪問してアンケート用紙を配布し、後日、再度訪問して用紙を回収する手順をとった。

（1）アンケート回収の結果

前述のアンケート方法により、観光客から 44 枚、地域住民から 51 枚のアンケートを回収した。質問項目によって無回答もあったが、集計の際はそのような質問項目があるものも含めて有効回答としたので、アンケート数は必ずしも、観光客では 44、地域住民では 51 になるとは限らない。

（2）アンケートの実施日

観光客へのアンケート実施日は、2009 年 10 月 29 日、11 月 5 日・8 日・9 日・13 日であり、地域住民へのアンケート配布日は、11 月 27・28 日であり、11 月 30 日と 12 月 1 日に回収した。

4-2　アンケート調査の結果

（1）回答者の属性

観光客に実施したアンケートの回答者は 44 人で、性別では「男性」が 9 人（20 %）、「女性」が 35 人（80 %）であり、女性に偏った結果となった。これは、観光客へのアンケート調査実施日が主に平日であったので主婦が多かったことや、男性より女性から多くの協力を得ることができたからである。地域住民へのアンケートの回答者は 51 人で、性別では「男性」が 23 人（46 %）、「女性」が 27 人（54 %）になった。

観光客の回答者の年代では、「50 代」と「60 代以上」の割合が大きく、両者を合計すると 65 %になった（**図 5**）。備中国分寺への観光客の多くが中・高年層であることや、観光客へのアンケート調査日が主に平日であったので、回答者の年齢層が比較的高くなったと考えられる。地域住民では、「10 代」、「30 代」、「80 代以上」はかなり少ないが、他の年代は 20 %前後の数値になった（**図 6**）。40 代～ 70 代の合計は 80 %になり、時間に比較的余裕のある年齢層から多くの協力を得ることができた。

回答者の職業は、観光客では、「主婦」が 23 人（51 %）で最多であり、続いて多い順に、「定年退職」が 6 人（14 %）、「学生」と「会社員」が 4 人（9 %）ずつ、「自営業」、「パート・アルバイト」、および「その他」が 2 人（5 %）ずつ、「農業」が 1 人（2 %）、「公務員」が 0 人という結果になった（**図 7**）。平日であったため、主婦と定年退職の合計が 65 %を占めることになった。地域住民への調査では、多い順に、「農業」が 11 人（21 %）、「会社員」が 9 人（17 %）、「主婦」が 7 人（14 %）、「自営業」、「公務員」、および「パート・アルバイト」がそれぞれ、5 人（10 %）ずつ、「定年退職」が 4 人（8 %）、「その他」が 3 人（6 %）、「学生」が 2 人（4 %）という結果を得た（**図 8**）。備中国分寺周辺には田園が広がっており、農業従事者が多いので、このような結果になったものと考えられる。

また、観光客への調査では、居住地域についても質問した。その結果、「岡山県」が 30 人（68 %）、「その他」が 14 人（32 %）であった（図は省略）。当然ではあるが、岡山県内からの観光客が多数を占める結果になったが、岡山県外からの観光客も少なくない。岡山県と

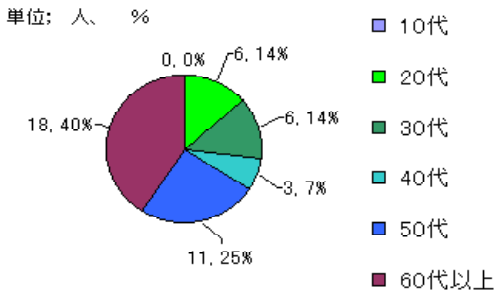

図 5　回答者（観光客）の年齢層
アンケート調査より作成.

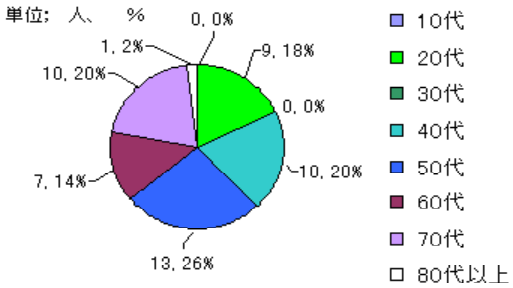

図 6　回答者（地域住民）の年齢層
アンケート調査より作成.

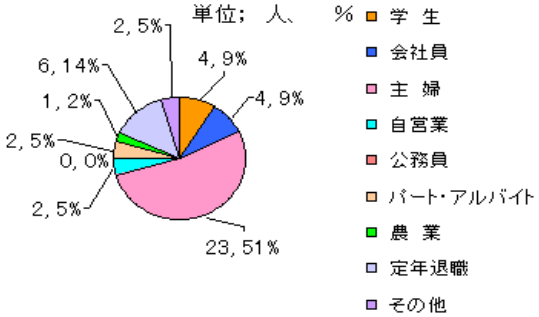

図 7　回答者（観光客）の職業
アンケート調査より作成.

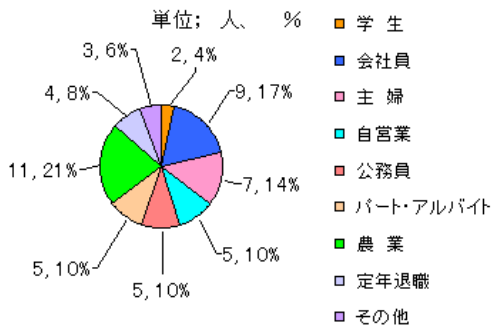

図８　回答者（地域住民）の職業
アンケート調査より作成.

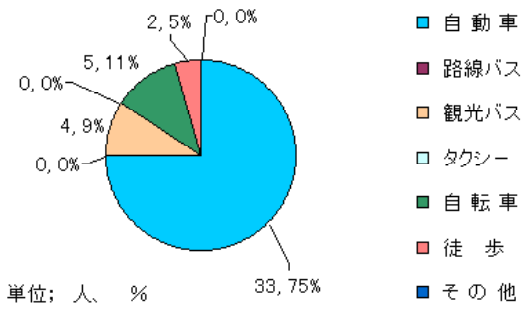

図９　回答者（観光客）の交通手段
アンケート調査より作成.

回答した人に居住地域を質問した結果、多い順に、「岡山市」が 16 人、「倉敷市」が 10 人、「総社市」が３人、「瀬戸内市」が１人となり、備中国分寺が位置する総社市に隣接する岡山市・倉敷市が大多数を占める結果となった。その他の回答では、多い順に、「広島県」が７人、「埼玉県」が４人、「大阪府」が２人、「静岡県」が１人であり、過半が隣県の「広島県」であった。

（２）交通

観光客へのアンケートにおいて交通手段を質問し、「自動車」「路線バス」「観光バス」「タクシー」「自転車」「徒歩」「その他」の７項目から１つ選択してもらった結果、多い順に、「自動車」が 33 人（75 %）、「自転車」が５人（11 %）、「観光バス」が４人（9 %）、「徒歩」が２人（5 %）、「公共バス」・「タクシー」・「その他」がそれぞれ、０人であり、自家用自動車での訪問が大半を占めた（**図９**）。これは、備中国分寺の南北２箇所に広い駐車場が完備されているからでもある。また、備中国分寺周辺には、こうもり塚古墳、備中国分尼寺跡、作山古墳、総社宮、宝福寺、造山古墳、鬼ノ城、福山城跡など、吉備文化の代表的な文化財が豊富に存在しているので、自動車での移動により多くの観光地を訪問することができ、利便性が良いからである。

アンケート調査を実施した際に、観光バスで訪問している観光客もみられた。しかし、次の観光地に移動するため、見学時間が設定・限定されており、備中国分寺の観光に長い時間を費やさない団体がほとんどであった。よって、バス利用客には時間的に余裕がないので、アンケート調査への協力を得ることができなかったことも、このような結果につながったものと考えられる。

観光客への交通手段に関する質問で、「自動車」あるいは「自転車」で訪問したと回答した人には「備中国分寺まで主に何を手がかりにして来ましたか」と質問し、「カーナビ（ゲイション）」「案内標識（道路標識や看板など）」「地図」「人づて」「その他」の５項目から１つ選

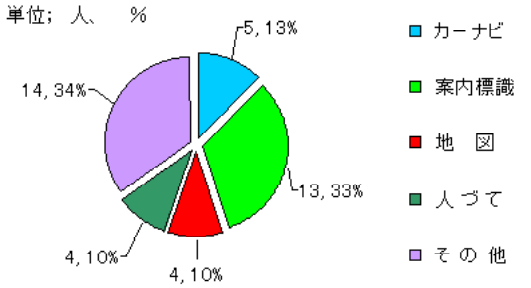

図 10　備中国分寺までの主な手がかり（観光客）
アンケート調査より作成.

択してもらった結果、**図 10** が得られた。多い順に、「その他」が 14 人（34 %）、「案内標識（道路標識や看板など）」が 13 人（33 %）、「カーナビ」が５人（13 %）、「地図」と「人づて」がそれぞれ、４人ずつ（10 %）である。その他の回答が最大であった理由は、場所を事前に知っていたので何も手がかりにしていないからである。また、場所を知っていた人の中には、特に手がかりにして来た訳ではないが、強いて言うならば案内標識と回答した人もいたので、案内標識が３割以上を占める結果になった。これらの理由で、自動車で訪問した人が７割以上であるにも関わらず、カーナビと回答した人が少なくなったと考えられる。また、地図を手がかりにして訪問した方の４人のうち半数が県外からの観光客であり、そして、人づてと回答した全員が自転車による訪問の観光客であった。

さらに、「自動車」あるいは「自転車」で訪問したと回答した人には、「備中国分寺に至るまでの案内標識（道路標識や看板など）は役に立ちましたか」と質問し、「役に立った」「役に立たなかった」「どちらでもない」の中から１つ選択してもらった結果、「役に立った」と回答した人が 14 人（38 %）、「役に立たなかった」が８人（22 %）、「どちらでもない」が 15 人（40 %）という結果になった（**表２**）。この質問意図は、備中国分寺

表 2　観光客からみた案内標識

	役に立った	役に立たなかった	どちらでもない	合　計
自動車	13人（41%）	4 人（12%）	15人（47%）	32人
自転車	1 人（20%）	4 人（80%）	0 人（0 %）	5 人
合　計	14人（38%）	8 人（22%）	15人（40%）	37人

アンケート調査より作成.

写真 7　図 11 の①付近の案内標識

写真 8　図 11 の②付近の案内標識

写真 9　図 11 の③付近の案内標識

写真 10　図 11 の④付近の案内標識

いずれも筆者らの撮影（2010 年 1 月）による.

周辺は田園が広がる地域であるので土地勘のない人にとっては分かりづらく、また、備中国分寺への案内標識の数も少ないと理解しているので、観光客が備中国分寺に至るまでの案内標識をどのように感じているかを調査するためである。

表 2 の自動車での訪問では、「役に立たなかった」という回答は 12 %であるが、「役に立った」という回答も 41 %で過半に達しない。「どちらでもない」という回答が約半数で最多であるのは、前述した通り、もともと場所を知っていたので特に手がかりにして来たものがないと回答した人が多かったため、案内標識を気にせず来たからであると考えられる。また、自転車での訪問では、80 %が「役に立たなかった」と回答した。JR 総社駅から岡山市に位置する JR 備前一宮駅までの区間は吉備路サイクリングロードであり、数カ所にレンタサイクルの店舗（通常の借用料は 400 円／2 時間）が存在し、サイクリングしながら吉備路の文化財を観光して楽しむことができるにも関わらず、観光客が自転車での訪問の際の案内標識に満足していない。サイクリングロードを設置した関係者は、このような現実をどのようにとらえるのであろうか。

地域住民への案内標識の調査の「観光客が自動車や自転車を利用して、備中国分寺へ訪問する際に、備中国分寺へ至るまでの案内標識（道路標識や看板など）は役に立っていると思いますか」という質問に対して、「はい」と回答した人が 41 人（80 %）、「いいえ」が 10 人（20 %）となり、役に立っていると考える人が多数を占めた（図は省略）。観光客への調査結果と比較して、地域住民には備中国分寺に至るまでの案内標識は役立っているという意識がある。それは、地域住民には土地勘があるので、案内標識がいくつかあるという事実を知っていても、日頃から案内標識をあまり意識していないため、備中国分寺への道筋を示す案内標識の存在についてはなおざりにしているからであろう。

写真 7～ 10 は、備中国分寺周辺で撮影した案内標識である。撮影場所については**図 11** を参照されたい。こ